

とまきの玉手箱

博物館からのメッセージ



めでたさの象徴―松竹梅

禍をまのがれ、幸福を招く―そうした意味を持つ文様は、吉祥文様と呼ばれています。

数ある文様の中でも、松、竹、梅は、鶴や亀とともに、代表的な吉祥文様といつてよいでしょう。本館の所蔵品を見ても、松、竹、梅をモチーフにした作品の数は多く、これらがいかに日本人に親しまれてきたのかよく分かります。

松、竹、梅を組み合わせた松竹梅の源流は、中国にあります。中国人は、この三つの植物をとりわけ神秘的な霊木ととらえ、これらに人間のあるべき理想の姿を投影してきました。

常緑樹である松は、冬にあっても青々とした葉を保つことから、長寿あるいは節操の象徴とされました。竹もまた、冬でも枯れることのない性質に加え、まっすぐに延びた姿から、心の清らかな人物に例えられました。梅の場合、一見繊細な姿でありながら、厳しい寒さの中で美しい

花を咲かせる強さがあります。

酷寒の中でも姿を変えない松竹と、寒さに耐えて花を咲かせる梅は、中国において「歳寒（寒い季節の）三友」とよばれ、貞潔さや志の高い人物を表すモチーフとされました。

この歳寒三友の考え方は、室町時代（1392～1573）の前半ごろには日本に伝来していたようです。

その後、三者の組み合わせは、吉祥招福の意味が強調されて一般に広まっていきます。江戸時代（1603～1867）に入ると、松竹梅の文様は、年のはじめや婚礼など、おめでたい場には欠かせない存在となりました。

脇指を収めたとみられる写真の刀箱は、単なる保存用の箱ではなく、そうした慶事のために特別に作られたでしょう。きらびやかな金梨地をバックに、金銀の時絵で土坡（小高く盛り上げた所）から生えた老松と二本の梅、細く延びた若竹を描き、井伊家の家紋である橘紋を散らし

ています。

ここに描かれているのは、当時における典型的な松竹梅の姿で、とりたてて個性的なものではありません。ただし、細部の描写は、いかにも大名家の伝来品にふさわしく、樹の幹から葉の一枚一枚にいたるまで、非常に精緻なものです。

また、箱全体を包むようにして描かれた松竹梅の図柄からは、金銀をふんだんに用いた豪華な装飾とあいまって、素直な瑞祥の気分が感じられます。

松、竹、梅という身近な題材を、いかにアレンジしておめでたい雰囲気を作り出すか。松竹梅の見所はそうした点にあるといつてよいでしょう。

（彦根城博物館学芸員 丹羽貴之）

写真の作品は、彦根城博物館テーマ展『吉祥のデザイン―松竹梅―』で展示します。

（元日から1月29日火まで、期間中無休）

金梨地松竹梅橘紋時絵刀箱（彦根城博物館蔵）

